

中で味わいながら上陸の指示を待っていた。

私のシベリア抑留の思い出

新潟県 遠藤新吉

私は、昭和十九年十月当時の満州牡丹江省東寧県石門子にあった野戦重砲兵第十七連隊に入営した。この地は、東滿国境（満州、朝鮮、ソ連）地帯といわれ当時の関東軍にとって、戦略的な拠点として重要な位置のところでされていたという。肉眼で見える国境の山々はソビエト領であり、時々陣地構築するソ連兵が見え隠れする地だけに、初年兵の私たちにとっては実に不気味の思いで厳しい訓練の日を過ごした。

やがて私たちの舞台は、昭和二十年五月、満州のほぼ中央にあたる四平街へ移駐したのであった。

同年八月九日、突如として日ソ開戦、すでに敗色濃厚な関東軍は、その指揮命令系統を失い、士気の低下によって戦わずして八月十五日の終戦を迎えるに至ったの

である。

軍隊生活まる一年も満たないうち終戦、やがて怒濤のごとく南下したソ連軍の下に集結を命ぜられ、さらに武装解除させられて見るも哀れな無力な集団と化したのである。

そして長い長い抑留生活が始まった。

大陸の冬は早い、やがて私たちは「帰国」を固く信じその年の秋には貨物列車に何十日も乗せられ、ソ満国境の町愛琿に集結させられた。この町は黒河（アムール河）という国境を流れる河の沿岸の町であって、河向こうがソ連領ブラゴエシチェンスクである。

十一月半ばになるとこの国境の河が一夜にして結氷し、この河の上を膨大な満州国から捕獲した物資を自動車であるいはそりで運び出した、この搬送に昼夜の別なく労働させられた。

何日かたったであろうか、私どもの集団はブラゴエシチェンスクの駅から二段に仮設した貨物列車に乗せられ、シベリア鉄道を走ったのであるが、お粗末な輸送計画であろうか、半日走って三日も四日も停車するという

超鈍行列車となり、捕虜収容所のある目的地までは何十日かかったであろうか、気の遠くなるような汽車の旅となった。

この間、少ない、そしてお粗末な食事、空腹をかかえながらの生活となったのである。

初めのうちは列車が走っている方向がわからないためとデマによってウラジオストック経由で帰国できると信じていたが、幾日たっても海や港と逆方向ということがわかると私たちの失望と落胆は大きなものがあつた。

我々の集団が着いたところは、ロシア共和国に属するブリヤート自治共和国であつた。住民の全部が蒙古人で、我々日本人とそっくりの風ぼうをした人々であつた。この自治共和国はモンゴル人民共和国との国境にあつて、キヤフタという町にほど近い炭坑地であつた。従つて私たちは、石炭の採掘など、これに関連した労働をさせられた。

冬はいてつくような酷寒のもと午後三時ごろから夜になるという北の国特有の地理的条件とノルマによる過酷な強制労働、さらに劣悪な食事……、夏は夏で大陸性気

候による湿度のない乾燥した厚さ、冬の反対の白夜が続く眠れない夜、私どもの収容所の多くの仲間たちが栄養不良によって死んでいった。

私もこの炭坑労働の最中、トロッコとトロッコの連結作業中、顔と下あごの部分がはさまれて骨折するという怪我をした。一時は顔が變形するのではないかという事態となつたが、約四か月ほど入院させられた苦い経験をした。

なにしろ、下あごの部分が骨折したので、これを固定したため、流動食を流し込むということで極度に体はやせ衰え、これが最後かと思つたこともあつた。

やがてどうにか怪我也峠を越したころ、病弱者のダモイ（婦国）が始まつた。この中に優先的に入るものだと思つて見事その選考からはずされ、とうとうこの地に昭和二十三年春までとどめられたのである。

特にこの地で奇異に感じられたことは、同じソ連の国民でありながら、ドイツ軍に捕虜となつたソ連の兵士の一団が対ドイツ戦争終戦後、解放され、アメリカ経由で自分の国へ帰つてきたあげく、自国の収容所に入れられ

強制労働をさせられていた。

この地での抑留期間二年五か月、ようやくダモイ（帰国）の命令によってウラウデンの町に集結したのが昭和二十三年四月であった。本当に長い長い悪夢にうなされたような期間から解放された。そして待望のナホトカに着いた。

しかし私たちは、またもやここで約一年四か月ほど、待ちぼうけを食わされたのである。ナホトカでの待機中は木材伐採と搬出というここでも重労働と「ノルマ」と「ダワイ、ダワイ」の連続であった。こうなると私たちは何を、だれを信じてよいかわからなくなり、心理的不安が重なり、やがては仲間同士がつまらないことでののり合ったりの人間不信が高まっていった。

昭和二十四年九月末、帰国が確実となり輸送船上の人となってはじめて「ダモイ」を身にしてみ感じたのである。

反戦の願いをこめて

長野県 西村 又夫

昭和二十年八月、満州昌図で終戦。混乱の中で九月四平においてソ連の武装解除を受ける。しばらく待機の生活が続く。

十月にはいりソ連軍の監視下満鉄貨車に積み込みの作業後、だれとなく伝わるウラジオオより内地に帰還するのだという言葉を信じながら、部隊編成のまま貨車で出発。黒河に到着したのはもう十一月。凍りついた河を渡りブラゴエシチエンスクよりはいり再びシベリア鉄道の貨車に乗車。期待したウラジオオとは反対方向に進行。これが長い抑留生活の分岐点だった。列車はシベリアの大平原を一日走って三日、半日走って一週間と駅に停車。窮屈な貨車、行く先不明な長旅。体調をくずし落伍する者も出始め、どこかにおろされていった。

貨車生活一か月ウランウデ駅で下車。鉄条網で厳重に